

推量の助動詞

「らし」及び「らむ」の歴史的考察

三十五回卒 小川 由起子

一、はじめに

「らし」と「らむ」は共に推量の助動詞と呼ばれるものであるが、その推量の性格は大きく異なっている。一般に、「らし」は根拠のある確実な推定を表わし、「らむ」は「疑問語……らむ」の呼応形式を多くとる、いわば疑問性の強い推量を表わすとされている。ところが、このように推量の意味上において相補的関係にあったと考えられる「らし」と「らむ」が、並用されていたのは短い期間であったとされている。

そこで、「らし」と「らむ」の実際の使用数や、接続・係り結び・副詞との呼応関係などの具体的な用法から意味及び両者の関係についての考察を試みた。以下、その用法の変遷について項目をあげながら述べていきたい。尚、「らし」については五十作品を取り上げ、総用例数は382例、^{2,098}「らむ」については十二作品を取り上げ、総用例数は2,098例である。

二、「らし」について

(一)使用数の減少

△表1▽からも明らかのように、「らし」の用例数は、『万葉集』の173例を頂点に減少している。それだけでなく、『万葉集』だけで総用例数の45.3%を占めており、また、『古今和歌集』においても20例のうち12例は、「読人知らず」、つまり『万葉集』の時代の末期から、平安時代初期頃のものである。そして、藤原公任(966-1041)が『新撰髓脳』の中で、「『かも』『らし』などの古詞など別して、つねに詠むまじ。」と説いているように、平安時代半頃には、「らし」はもはや古語として扱われていたのである。それ以降「らし」は、和歌の中で伝統的な用法として用いられるだけに止まり、実際に用いられることはなくなったと考えられる。他に芭蕉の紀行文中に4例と多く見えるのは、「近世の擬古文中には、『けらし』『ならし』というような複合形式としてかなり多く用いら^(推)れているものの一例である。

作品	使用数	総数	歌中数	作品	使用数	総数	歌中数
古事記	6		(4)	金葉和歌集	6		(6)
万葉集	173		(173)	詞花和歌集	2		(2)
竹取物語	0			今鏡	0		
菅家文草・管家後草	0			とりかへばや物語	0		
伊勢物語	6		(4)	千載和歌集	7		(5)
土佐日記	1		(1)	山家集	2		(2)
古今和歌集	20		(19)	松浦宮物語	3		(3)
凡河内躬恒集	7		(7)	無名草子	0		
伊勢集	5		(4)	新古今和歌集	19		(18)
後撰和歌集	17		(17)	金槐和歌集	24		(24)
大和物語	3		(2)	宇治拾遺物語	0		
宇津保物語	0			海道記	0		
蜻蛉日記	7		(5)	保元物語	0		
落窪物語	0			建礼門院右京大夫集	1		(1)
枕草子	0			東関紀行	0		
拾遺和歌集	14		(14)	続後撰和歌集	19		(19)
和泉式部日記	0			十訓抄	3		(2)
源氏物語	5		(4)	平家物語	0		
紫式部日記	0			十六夜日記	1		(1)
更級日記	0			徒然草	0		
打聞集	0			曾我物語	0		
堤中納言物語	0			増鏡	1		(1)
いほぬし	1		(1)	伊曾保物語	0		
夜の寝覚	0			芭蕉紀行文	5		(1)
狭衣物語	0						
後拾遺和歌集	12		(11)	総計	382		(362)

<表1> 「らし」の使用数の変遷

用例数 作品	見ゆ	聞ゆ	思ふ	計	意味 分類 (一)	" (二) " (三)	
						" (二)	" (三)
古事記				0	2	1	③
万葉集	35	13	4	52*	130	20	23
伊勢物語	1			1	4		2
土佐日記				0			①
古今集	3	1		3	20		
凡河内躬恒集	1			1	3	1	③
伊勢集	3			3*	5		
後撰集	1	1		2	11		6
大和物語				0	2		1
宇津保物語	1			1	8	1	3
蜻蛉日記				0	4		3
拾遺集		1		1	6	3	5
源氏物語	1			1	4		1
いほぬし				0			①
後拾遺集				0	5	3	4
金葉集		1		1	5		1
詞花集				0	2		
千載集	1	1		2*	2	2	③
山家集				0	1		①
松浦宮物語				0	2		1
新古今集				0	14	1	4
金槐和歌集	1	1		2	21		3
建礼門院 右京大夫集				0			①
続後撰集	1			1	13	3	3
十訓抄				0	1		②
十六夜日記				0	1		
増鏡				0			①
芭蕉紀行文				0	1		④
計	49	19	4	71	268	35	79

<表2> 視聴覚・思惟判断による根拠の用例数と、「らし」の意味分類

(二) "根拠のある確実な推定" の変化

「らし」は、ある明らかな根拠・理由に基づいて他の未知のことを推定する意を表わすのが本来の用法であり、全用例の70.2%を占めるものであるが、時代が下がるにつれ、その用法も変化している。

①推定の根拠における知覚動詞の減少

「らし」が根拠を示した場合、その根拠となるものは、行為・事件・自然現象など具体的な事柄そのものであるが、

その根拠を示す場合、事柄をそのまま示す他に、作者の知覚・思考を通したのとして示す方法がある。この作者の知覚・思考を通すとは、主観的な判断を下すものではなく、ある客観的事象に対して、作者の知覚・思考という認定を加えることである。つまり、客観的事象は、作者自身によって裏打ちされた、より明確な根拠となり、より必然的な推定を導くものであると考えられる。この根拠を示す部分における知覚動詞の使用数であるが、 \wedge 表2 \vee からも明ら

かなように、『万葉集』では53例、根拠に基づいた推定の全用例中、40%にもよるが、その後減少し、『新古今和歌集』中の根拠に基づいた推定14例のうち、知覚動詞を含む根拠の例は見当らない。この知覚動詞の減少という事象から、根拠における作者の認定という、事実をより明確にする働きが弱まり、「らし」における根拠と推定の結びつきの必然性が、一段階弱いものになっていったということができるだろう。

② 推定の根拠のあり方の多様化

平安時代になると、和歌以外の前文や詞書に根拠を示したり、言外の根拠を推察させる例も見える。このように「らし」の根拠の示し方が多様化しているという事象は、「らし」の用法の成熟度を示すものであると言えるだろう。しかし、一方では「らし」の明確な根拠に基づいた推定という本義的用法が崩れ始めてきているとも言えるのではないだろうか。

③ 根拠を示さない推量の増加

「らし」の本義的用法を表わすものを意味分類(一)、「らし」を明らかに事実を表わす語につけて、その事実の原因や理由などを推量する意を表わすものを意味分類(二)、根拠や理由は示さずに、確実度の強い推量の意を表わすものを意味分類(三)とし、それにより用例を分類していったものが表2Vである。この表からも明らかかなように、意味分類(一)とされるものが減少していく反面で、意味分類(三)とされるものが増加してきている。これは、根拠に基づいた推定

という「らし」本来の意味が薄れてきていることを示している。つまりこの現象は、「らし」の用法が、他の推量の助動詞と紛れるような、一般的で単純な推量へとその中心を移していることを示しているのである。

四 疑問の副詞・係助詞の増加

「らし」は、「確実度の強い推量」という本来の性格とは相反する疑問語と共に用いられない筈である。けれども、表3Vに示すように、平安中期には疑問の係助詞「や」を受けたり、疑問の副詞・代名詞に対応する例も見えるようになる。次にその用例を示す。

：アツサユミヒキミン人ノアサケリモハツレカタク覚エナカラ、志ノユク所、タタニハイカ、止ムトテナラシ。(十訓抄・序)
板敷山の北を流て、果は酒田に入。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稲つみたるをやいな舟といふならし。(奥の細道・最上川下り)

前者は、「どうして止めるのであろうか」と原因・理由を推量している全く疑問性の強い推量であり、「らし」よりも「らむ」の用法に近いものとなっている。後者は、舟に稲を積んでいるのを、稲舟とかいうらしい」と他から聞いたことを受け入れて推量しており、これも「らむ」の伝聞の用法に近いものである。このように両者とも、形式的には「らし」を用いているが、実際は「らむ」に近い用法であり、「らし」が本来持つ確実な推量という意は薄れてしまっている。そして、この事象は、前の③で述べたように、「らし」本来の用法が薄れ、単純な推量化したという

用例数 作品	係助詞 や	疑問の 副詞	(うべし) うべ	まこと	ただ
古事記					
万葉集			5	1	
伊勢物語					
土佐日記					
古今集					
凡河内躬恒集					
伊勢集					
後撰集					
大和物語					
宇津保物語					
蜻蛉日記					
拾遺集					
源氏物語			1		
いほぬし	1				
後拾遺集	1		1		
金葉集			1		
詞花集					
千載集	1				
山家集					
松浦宮物語					1
新古今集					
金槐和歌集	3		1		
建礼門院 右京大夫					
続後撰集	1	何			
十訓抄		イカガ			
十六夜日記					
増鏡					
芭蕉紀行文	1			1	
計	8	2	8	2	1

<表3> 疑問の係助詞・副詞と、肯定の副詞の使用数

ことと共に、「らし」が、「らむ」の用法に接近してきているということも示しているのである。

④肯定の副詞の増加

『万葉集』には、「うべし」「まこと」などの副詞によって、「らし」で示される推定の過程が肯定され、それによって、推定の確実性をより強めている用例が6例見える。しかし、その後は、平安時代末期・院政時代以降に5例見えるだけである。先の△表3▽には、『後拾遺和歌集』

『金槐和歌集』に副詞「むべ」に対応するものが1例ずつ、疑問の係助詞「や」に対応するものもそれぞれ1例・3例

と見える。また芭蕉の紀行文中にも肯定の意の副詞「まこと」に対応するものが1例、「や」に対応するものも1例見える。この事象と先の(三)でも述べた「らし」本来の持つ確実な推量の意が薄れ、単純な推量を示すようになったことを合せて考えると、疑問性のある推量を示す時、疑問の副詞や係助詞「や」を用いたように、その推量が確実な推量であることを示すために、肯定の意を表わす副詞が再び用いられ始めたのではないかと考えられる。そして、平安時代以降の6例は、「らし」自体が持つ推量の確実性が弱まったために、肯定の意の副詞を用いることによって推量

の確実性を示した例であると考えられる。つまり、時代が下がるにつれ、「らし」自体の確実性が薄れ、よってそれを補うための肯定の副詞の必要性が高まり、その使用例が増加したのである。

二、「らむ」について

(一)「今頃は……」の形の減少

「らむ」は現在起こっている事柄について推量する語であるが、その中でも、「今頃は……だろう」と現在眼前にない事実について推量する用法は、『万葉集』では164例・73.2%とその用例の四分の三近くを占める「らむ」の本義的用法である。けれどもこの用法は、『源氏物語』和歌用例中で12例・20.6%、『新古今和歌集』で74例・30.8%と減少している。そればかりでなく、「今頃は……しているだろう」という現在推量を時制の面から補強する「今や」「今日か」などの語も、『万葉集』を頂点に減少している。この二点から考えると、「らむ」の現在推量という本義が、薄れてきていると言えるのではないだろうか。

(二)「むずらむ」の形の増加

(一)で述べたように、「今頃は……しているだろう」という現在推量の用法が減少していく一方で、「らむ」が助動詞「むず」に接続する用例が平安時代中頃から見え始める。『平家物語』では、88例・全用例中29.6%が「むず」に接続している。「むず」が、未来及び時にかかわりのない推量の助動詞「む」の強調表現として成立したものであるため、

「むずらん」の形で未来の事柄を推量する例も見える。このように、現在推量という「らむ」の本義が薄れ始め、「らむ」は時制に関係のない推量を表わし出している。

そこで、「らむ」が現在の事柄について推量する意を示すのを補助するために、『平家物語』中の和歌においては、3例が3例とも「今……」という時を示す語が用いられているのであろう。つまり、「らむ」の特徴である現在の事柄に関する推量という時制に関する枠組みが薄れたことにより、「らむ」は時制に関係しないという「単純」な推量へ近づいたのである。そこで、「むず」の増加と共に、「今……」という副詞も同時期に増加しているのである。

(三)係助詞「や・か」から疑問の副詞へ

(一)で述べたように、現在推量の意が、「らむ」の本義的用法であるが、それと共に言える「らむ」の特徴は、疑問性の強い推量を意味することである。△表4▽からも明らかのように、『万葉集』『新古今和歌集』では、用例の半数以上で、「らむ」は疑問の係助詞「や・か」に対応し、疑問性を含んだ推量を示しているのである。この疑問の係助詞はその後も多く用いられ、「らむ」の疑問性を含んだ推量という特徴も持続している。けれども、その疑問のあり方は、『万葉集』以降、係助詞による「……だろうか」という単純な疑問を含んだ推量から、不定称の代名詞や、疑問の意の副詞による疑問詞に対応する推量に変化してきている。△表4▽からも明らかのように、『万葉集』で17例、『古今和歌集』で30例、『新古今和歌集』で96例と増加し

用例数 作品	用例 総数	(歌中 用例)	疑問の 係助詞 や	” か	計	原因 推量の 副詞	疑問の その他 副詞	疑問の 副詞 を補うもの	計	疑問の語が ないものが
万葉集	224	(224)	22	91	⑪⑬	3	14	5	22	105
伊勢物語	25	(23)	9	2	11	1	9	0	⑩	⑥
古今和歌集	126	(126)	54	8	62	14	16	16	④⑥	②⑧
蜻蛉日記	106	(44)	30	7	37	11	19	1	③①	48
枕草子	111	(6)	17	3	20	17	15	0	③②	61
源氏物語	662	(58)	108	35	143	81	153	5	②③	324
新古今和歌集	241	(240)	112	25	⑬⑦	36	60	5	⑩①	③③
宇治拾遺物語	107	(0)	14	10	24	9	14	2	25	69
徒然草	18	(0)	4	2	8	3	2	1	⑥	8
平家物語	297	(9)	57	28	85	20	54	0	74	163
曾我物語	122	(2)	21	8	29	13	17	0	30	71
増鏡	59	(20)	22	4	26	3	7	2	12	24
計	2,098	(752)	471	223	694	211	380	37	628	851

〈表4〉 疑問の係助詞・副詞・代名詞を伴う用例数

ている。これは、それだけ疑い推量するという「らむ」の用法が、原因・理由、不定の時・場所・人など広範囲に広がっていることを示すものである。またこの他にも、『古今和歌集』に16例と目をひくように、疑問の語を省略して、原因や理由を推量する用法も用いられ、「らむ」が疑問性の強い推量としての成熟度を示すものとなっている。

四 「らむ」の多様化

(三)では、「らむ」の疑い推量する範囲が広がったことについて述べたが、その現象は、疑問性のある推量だけに止まらない。その他にも推量する範囲や用法が広がってきているのである。「らむ」の本義的用法の眼前にない状況について述べるところから、「文献によれば」という「話では」とのことだ」など伝聞による推測や婉曲といった用法を用いることが多くなっている。これは散文において目につくもので、『万葉集』では11例・49%しか用いなかったものが、『枕草子』では18例・全体の16%に当たる用例に見える。また、疑問性を残しながらも、根拠に基づいた推量を示す用例など、多様な推量の状態を「らむ」は持ち始めている。

(四) 確実性を表わす副詞の増加

(四)でも述べたように、平安時代も半ばを過ぎると、「らむ」は多様な推量を表わし始めるが、この多様化の傾向を端的に示しているのは、確実性を示す副詞の増加現象である。このような確実性を示す副詞に対応して、「らむ」は、その本来の疑い推量するという特徴とは正反対の、むしろ

「らし」の本義に近い「きつと……だろう」という確実な推量の意までも、自らの推量の範囲に取り込んでしまったのである。△表5▽からも明らかのように、この用法は、

副詞 作品	用例 総数	さも	さぞ	さこそ	むべ	げに	まことに	かならず	うたがひなく	さだめて	一定	いかにも	いかさま	計
万葉集	224													0
伊勢物語	25													0
古今和歌集	126				2									2
蜻蛉日記	106				1		1							2
枕草子	111	1		2			2							5
源氏物語	662		2		2	6	1	1						12
新古今和歌集	241			2										2
宇治拾遺物語	107	1	1			2	1	1	1	3				10
徒然草	18						1							1
平家物語	297		2	8		1	7			23	1			42
曾我物語	122		9	4		2				5		1	1	22
増鏡	59		1	2		1				1				5
計	2,098	2	15	18	5	12	13	2	1	32	1	1	1	103

〈表5〉「らむ」と共に用いられている肯定・確実の意を表わす副詞の数

時代が下がるにつれ、着実にその副詞の使用例を増加させ、『曾我物語』では、22例・16%の用例が、副詞の働きにより、「きつと……だろう」などの確実な推量を示しているのである。また、作品によって用いられる副詞自体違うものの、多様化してきており、「らむ」が副詞と対応し、確実性のある推量を示すことが、一般的な用法として定着したことを窺わせるものとなっている。また、用いられている副詞も、『源氏物語』などでは、「むべ」や「げに」など推量を肯定する意の副詞が多かったのに対し、鎌倉時代以降は、「必ず」「定て」など確実な推定を意とする副詞が増加している。これは、平安時代の文学が婉曲的表現を好むのに対し、それ以降の軍記物は力強い断定的な表現を用いる差であるかもしれないが、大きな変化であったと言えるであろう。つまり、「らむ」自身も、そのような副詞に呼応する確実性のある推定をも示すというように、用法の幅を広げたとと言える。しかし一方では、「らむ」が本来有していた、疑い推量するという特徴が薄れ、その推量の性格を問わない単純な推量に近づいたということも示しているのである。

三、「らし」と「らむ」の変遷について

一、二において、「らし」「らむ」それぞれについての用法の変化を中心に述べてきた。推量の意味上において相補的関係にある両者が、互いに他方の用法を取り入れ、その推量の範囲を広げてきたと言えるであろう。両者の用法

の変化を見ながら関係の変遷を追っていききたい。

『万葉集』の時代、「らし」「らむ」の使用例は、それぞれ173例、224例と数多く用いられ、根拠に基づいた確実性のある推定を示す「らし」の用例は130例・70.2%を占め、現在眼前にない事実について推量を示す「らむ」の用例は164例・73.2%を占める本義的用法中心のものであった。しかし、その後「らし」は、もはや和歌の中で擬古的に用いられるだけのものとなった。そこで、根拠のある推定や確実性の強い推量を表わすために、肯定の意の副詞「むべ」と共に用いて、これに充てるような「らむ」の用法が見え始めたのである。しかし、平安時代でも、まだ和歌においては「らし」が比較的用いられていたため、この「らむ」の用法は散文の方から広がり始めた(表5参照)のであろう。そして散文の中で、「らむ」が疑問性を含む推量も確述性のある推量も示したのであるが、それによって「らむ」と「らし」が混同され始め、「らし」の方でも平安時代も半ばを過ぎた頃から、疑問性を含んだ推量の形を見せ始めたのである。しかし、「らし」自体の使用例が少なかった事から、この用法はあまり広く用いられることはなかったようである。そして鎌倉時代に入ると、「らし」の使用例はますます減少し、「らむ」に用いられる副詞も「さだめて」など確実性の強い副詞が多くなった。またその使用例も増加し、「らむ」は疑問性を含む推量と、確実性の強い推定という相反する要素を、副詞などの働きにより同時に示し得るようになったのである。「らし」と「らむ」は互いに似通っ

た推量、つまり特徴を持たない単純な推量の意しか持たなくなり、そのため「らし」は、「らむ」に吸収された形となったと考えられる。松尾捨次郎氏は、このような「らし」について、

……らしの用法の大なる變化とも言へるが、又らしが散文は殆んで絶滅し、和歌としても、用ゐられることが非常に少なくなつた結果、らしの傳統的の正しい用法が忘れられたのであると見た^(註2)。

と説明されているが、ここでは「らむ」の用法の広がりに関連づけ、先に述べたように「らし」と「らむ」の用法が変化していったと考えたい。これは、△表6▽に示すように、「らし」の使用数の減少と「らむ」の肯定・確述の副詞と呼応する数の増加が軌を一にすることからも言えるのではあるまいか。つまり、「らし」は単に「らむ」に「壓倒^(註3)」されたのではなく、共に互いの相反する推量の用法を

	「らし」の 総用例数	「らむ」の 副詞の数
万葉集	173	0
伊勢物語	6	0
古今和歌集	20	2
蜻蛉日記	7	2
枕草子	0	5
源氏物語	5	12
新古今和歌集	19	2
宇治拾遺物語	0	10
徒然草	0	1
平家物語	0	42
曾我物語	0	22
増鏡	1	5

<表6>「らし」の総用例数と「らむ」の肯定・確実を示す副詞の数

吸収し合い、似通った多様な推量を示すという用法の変化に至ったのである。そして、数量的に優勢であった「らむ」に「らし」が吸収された形となったのではないだろうか。

四、おわりに

以上、推量の助動詞「らし」及び「らむ」について考察を進めてきたが、推量の意味上において相反する意を持つ両者の用法の変化は興味深いものであった。『万葉集』の時代においては、それぞれの本義的用法、確かな根拠をもとにした推定の意を示す「らし」の用法、現在眼前にない事実についての推量の意を示す「らむ」の用法が確立されていたが、平安時代も半ばを過ぎると、それぞれの用法から離れた多様な用例が見え始める。共に似通った全方面的な推量の意を示し出すのである。そして、結果的には、数量的に優勢であった「らむ」に「らし」が吸収された形となるが、「らむ」自体にもはや特徴がなくなり単純な推量の意しか示さなくなっているのである。

△補註▽

1. 「日本文法大辞典」 松村明編 明治書院
2. 「助動詞の研究」 松尾捨次郎 白帝社
3. △註2▽に同じ